

## 《卒業研究報告》

## リアルとリアリティーの反転

## —SNSの発展は若者の人間関係構築にどのような影響を与えたのか—

林 良樹 (荒井ゼミ)

## 第1章 はじめに

本章ではまずはじめに、本研究の概要について述べていく。

## 第1節 概要

新型コロナウイルスの蔓延によってマスクの着用が義務化されたことによる弊害は、素顔を一目で見てわからなくなったことだ。確認方法といえばソーシャル・ネットワークング・サービス（以下SNS）にてアップロードされているプリクラやエフェクトのついた写真などいわゆる「盛れている」写真を見ることだ。このように素顔を初めて知るきっかけがSNS上へと移行していった現代では、SNS上に相手の本質を見出す風潮が根付いていった。その結果、現実で初めて見るお互いの素顔と盛れた写真の間に生じるギャップを背景として、「マスク美人」や「雰囲気イケメン」という言葉も広がっている。また、その風潮は新型コロナウイルスの収束が確認されつつある今に生きる若者の間に色濃く受け継がれている。

SNS上に相手の本質を見出す風潮とは、男女ともに顔が整っているかいないかで関係を構築するかしないかを決めることであり、そのハードルは、従来<sup>1)</sup>に比べるとはるかに高くなったように考えられる。従来では顔が整っている人には関係を構築する機会が訪れ、そうでない人には訪れなかつ

た。しかし現代では、顔が整っている人にもそうでない人にも平等に関係を構築する機会が訪れるようになった。一体どういうことか、本研究では関係を構築する機会が平等になった理由と、SNS上のリアリティー（現実に、加工や切り取りをして構築した現実感）を相手の本質として捉えるようになった結果、関係の構築は従来と比べて容易になったのか否かという2つの柱を立てる。そして現代の友人、恋人関係の拡がりとは従来に比べて大きくなったのか、小さくなったのかを解き明かしていく。

## 第2節 目的

本研究の目的は、新型コロナウイルスの流行禍において、発展したSNSが若者にどのように影響を与えたのかを明らかにすることである。特に新型コロナウイルスがもたらしたマスク着用義務を起点に他者の第一印象は目元と全体の雰囲気のみとなった。これにより、SNS上に存在する他者の素顔を現実の素顔として認識してしまう風潮が形成され、自身の中で勝手に作り上げた理想像を他者に押し付ける傾向が現代の若者たちの中には存在する。このような中、SNSは交友関係や恋愛関係にどのような影響をもたらしているのかを明らかにしていきたい。

1. 本論文における従来とは具体的に、新型コロナウイルスが蔓延する以前までを指すこととする。

### 第3節 研究背景

2019年12月初旬に中国の武漢市にて第1例目の感染者が報告された。それからわずか数か月の間にパンデミックと呼ばれるほど、新型コロナウイルスは世界に対して猛威を振るった。当時高校2年生だった私は、相次ぐ学校行事の規制やマスク着用の義務化から従来の世界では見ることのないような光景を目の当たりにした。

そんな惨状の中、急激な発展を遂げた事業がSNS産業だ。数あるアプリケーションの中でも決済アプリやZOOMなどの非接触型で日常の行為を完結できるものの需要が高まった。また在宅期間が増え、TikTokや動画配信サービスなども新規参入が流れ込み、大勢の人が新たな文化に触れるきっかけにもなった。人との接触や物との接触が制限された世界で目覚ましい発展を遂げたSNSは、人と人、人と物をマッチングさせるサービスの発展にも貢献した。特に人と人をマッチングさせるアプリの市場は急拡大し、その需要は非常に高いものとなった。10年前の人ならば、誰とでも繋がるのが可能になった現代を見て友人や恋人を作ることに苦勞することはないと断言するかもしれない。しかし現代を生きる人々にとってSNSの発展に伴う苦勞もあるのではないだろうか。

そのように考える理由の一つが、SNSに上げられている写真というのは果たしてありのままの人を映すものなのだろうかという疑問だ。例えばプリクラやエフェクト、輝度、彩度などの写真自体を美しく見せる加工を全く施していない写真や、自分が自信のある部位のみを載せるいわゆる片目界限など写真映りの良い写真を選んで投稿するように、映りの悪いものや、自分が納得していない自分の姿を載せることは大半の人が避ける。それら自信のある写真を本人の素顔としてギャラリーは認識し、マッチングアプリにおいてはそのリアリティーまたは幻想を他人に押し付ける風潮が観測できるようになった。運よく自分の理想とする

顔を持つ相手を見つけられ、出会いに発展した場合でも待ち合わせに来た人は別人だったという事例がここ数年で耳にするようになった。また自分が相手に押し付けていたリアリティーや幻想のハードルが高いほど実際に会った際の落差に対して気持ちが冷めてしまうといったいわゆる「蛙化現象」という言葉が流行するほど、リアリティーに対するギャラリーの期待度は高いものであることがうかがえる。

そのようなリアリティーに踊らされてしまい、時間を無駄にしてしまった事例や、高い期待感が会ったことすらない相手への好意に変わり、その期待が高ければ高いほど失意に変わってしまう事例なども存在している。このようなことから見られるように、現代では友人や恋人作りの指標が暴走してしまっているといえることもできる。また、本来発展するはずであった関係が失われてしまうケースがあることに気付ける人も少なくなってしまうようにも考えられる。これこそがリアルとリアリティーを認識する順序が逆になった現代での弊害ともいえ、私が研究をしたいと考えるに至った事象である。

本研究は、SNS上のリアリティーを相手の本質としてとらえてしまう現代の若者の実態を調査し、友人や恋人など関係を構築することは難しくなってしまったのか、それとも簡単になったのかを解き明かしていく。

### 第4節 研究対象と研究方法

本研究では大学に通う学生に対してインタビュー調査を用いて、得られたサンプルから分析を交え、研究を進めていく。

他者の外見から得られる情報の中で「顔」という最もわかりやすく情報が得られた部分が遮断された。しかしコロナが流行したなかで、ZOOMやTwitter、InstagramなどのSNS技術の発展が世界中の不特定多数の人々と繋がることも可能にし

た。

我々はSNSを用いて情報を取得し、つながりのある人についても初めて見る素顔がInstagramやTwitter等のSNS上が多くなった。よって本研究では他者について知る機会がSNS上のほうが多くなった現代に生きる若者の生きづらさなども考察していきたい。

また、SNS上で他者についての情報を得ることが増え、実際の顔とエフェクトやプリクラなどで加工された顔が無数に存在する中でリアルとリアリティーの乖離が引き起こす関係性の変化も研究対象とする。

#### 第5節 協力者のプロフィール

Aさん、Aさんは東京都出身の21歳男性。都内の大学に通う大学3年生だ。恋愛系のマッチングアプリを日常的に使い、日々出会いを求めている。TinderやPairsなど幅広いマッチングアプリを駆使し、純粋な出会いの場を求めている。しかし彼女はいない。インタビューは、2024年7月21日(大学構内)にて実施した。

Bさん、Bさんは東京都出身の21歳男性。都内の大学に通う大学3年生だ。Instagramをいろいろな人と繋がれる一つのツールとして使っており、見られるものとしての投稿には気を付けている。そのため本アカとサブアカの2種類のアカウントを使い分けている。インタビューは、2024年7月21日(大学構内)にて実施した。

Cさん、Cさんは神奈川県出身の21歳男性で、都内の大学に通う大学3年生だ。日常的にInstagramを活用し、トレンドのチェックや好きなアーティストの情報を得ること、投稿することを楽しむなど活用方法は多岐にわたる。個性を大事にし、自己主張の強い人に惹かれ、自身にはない視点を持った人を好む。インタビューは、2024年9月12日(大学構内)にて実施した。

Dさん、Dさんは新潟県出身の21歳女性。都内

の大学に通う大学3年生だ。彼氏がいるため恋愛系のマッチングアプリは使ったことがなく、主にInstagramを使う。自分からあまり反応することはないが、共通のフォロワーなどがいた場合は話すきっかけに使うこともある。自身の個性を積極的に発信し、唯一無二の世界観を展開している。インタビューは、2024年10月10日(大学構内)にて実施した。

Eさん、Eさんは東京都出身の21歳女性で、都内の大学に通う大学3年生だ。Instagramは大学やバイト先の人、アイドルやインフルエンサー、あるいは服飾関連のアカウントをフォローし、幅広い情報を得るために活用している。彼氏がいるためマッチングアプリは使ったことがない。服飾に興味関心が高く、おしゃれな人の投稿をみることを好む。インタビューは、2024年10月10日(大学構内)にて実施した。

#### 第6節 先行研究

SNS利用にともなう友人関係上の問題はコロナ禍以前より多く指摘されてきている。例えば、河合大介は、頻繁にSNSに投稿する者は、一時的に友人関係満足度にポジティブな影響をおよぼすが、全体で見るとよく投稿する人ほど、友人関係満足度や孤独感に関してネガティブな影響を及ぼしていることを指摘している(河合2014)。この内実をより深めたものとしては、高校生の友人関係とSNS利用にともなうネガティブな感情について述べた、中山満子の研究が挙げられる。中山は、閲覧強迫、情報拡散不安、社会的比較に分類を行っており、友人と心を打ち明けてつきあう関係においてはSNS利用がネガティブ経験につながらないが、傷つけあうことを回避しようとする傾向が強い場合に、SNSのネガティブ経験が増大するということを指摘している(中山2018)。このように、友人関係が成立して以降のSNS利用における心理的問題について論じられてきた。

このような若者の人間関係への成立期の問題を恋愛を軸に明らかにしたのが、大森美佐である。大森は、若者の恋愛関係の成立において、ケータイ・メールは、恋愛関係を成立させる上で欠かせないツールであり、特に最初の段階では、ケータイ・メールがないときっかけがつかれないとみなしていることを明らかにした。ケータイ時代においては、まずお互いのメールアドレスを交換することから、「恋愛」関係がはじまる。そして、ケータイ・メールを通して、あらかじめデートをするための関係をつくっておくことが必要だと認識されていた。ケータイメールは、恋愛に関する対人関係能力の高い自己イメージをメールによって操作し、時空間を調整しながら、慎重に「言葉」を選ぶことで、異性に対して「気を遣える」自己像をメッセージとして伝え、アピールすることで、恋愛関係に至らせるようになってきているという（大森 2014）。このように、時空間を調整しながら自己像をメッセージとして伝え、相手に好印象を持たれるようにするということは現在にもつながるだろう。

これら、友人関係、恋愛関係成立期の研究において、前提となっているのは、基本的には対面での接触があり、対面でSNSを交換することや、メールアドレスを交換するというものである。

しかしながら、コロナ禍という対面の接触が極度に制限されるという特殊な状況下においては、対人関係において出会う順番が、多くの人間にとって、新しい対人関係が、対面から非対面へと変化せざるを得ない時代であった。しかしながら、若者の友人関係や恋愛関係成立期におけるこの順番に着目した研究は見当たらない。

そのため、本研究では、その順番に着目しながら、リアルな情報の前に、リアリティーの情報を目にするのが多い時代、とりわけ、高校生、大学生の時代を対面接触が制限される中で、過ぎてきた若者に焦点を当てながら、彼らの友人や恋人

関係の構築にどのような新たな傾向がみられるのかを明らかにしていきたい。

## 第7節 仮説

コロナ禍によって、交流の場が国家レベルで制限をかけられた学生は、多くの出会いの機会を逃してしまったといえる。そんな彼らの武器はSNSである。前述の通りコロナ禍がマイナスに働いた面は多岐にわたる。しかし逆にプラスに働いた面も少なからずあるだろう。それがSNS技術の発展である。コロナ流行後には交流の場を失い、多くの出会いを逃した学生は集団での交流から個人間での交流のスタイルが確立された。

それを体現するアプリがTinderやPairsなどのマッチングアプリである。そのマッチングアプリでは出会いを求めため、自分をよく見せたいと思うことは必然の行動であるといえる。しかしエフェクトやプリクラなどで加工したプロフィールは互いに幻想を見せ、実際に会ったときに幻想とのギャップを与える結果となり、一目見ただけで関係の発展が見込めなくなる事態も目立ち始めている。「蛙化現象」や「マスク詐欺」といった言葉が若者間で流行してしまうぐらい、SNS上のリアリティーを相手の本質とみなし、期待してしまう風潮が高まったことがわかる。

これはマッチングアプリのみに限った話ではなく、InstagramやTwitterなどコロナ禍に生きる学生にとっての武器であったSNSがマイナスに働いてしまう事象ともいえる。コロナ禍といわれマスク着用の義務を強いられた時期からその義務は緩和され、第一印象が素顔からの情報に戻った今でもSNS上のリアリティーに理想を抱き、期待値をあげてしまう風潮は続いている。その期待値は誰とでも繋がれる現代においては関係の発展の障壁となり、自ら関係を狭めてしまっている。

このようにSNSが普及し新たな出会いのスタイルが確立された現代では、リアルとリアリティー

が逆転し、リアルよりも先にリアリティーを他者の本質としてしまい、相手への過度な期待や、選別の判断材料として働いてしまう。その結果、本来発展するはずであった関係性が発展しなくなってしまっていると考えられる。

## 第2章 SNSの普及による他者についての予備知識の獲得

Instagramが普及し、学生の大半がアカウントを持っている現代では様々な人が様々な形で交流することが可能になった。従来では初対面の相手と話す際には会話を重ねて相手の趣味や感性を知る必要があったが、アカウントを交換することで聞き出す工程をスキップし、容易に相手の趣味や感性について知ることができるようになった。その事前情報はInstagramに写真を投稿している人のみからしか得られないと考えがちだが、相手のフォロー欄や共通のフォロワーからどんな人をフォローし、どのような関係を築いているかといった内面の情報も得ることができる。

ここでいう内面の情報とは、相手はどのような物が好きで、どのような人が好きといった趣味嗜好を司る情報と定義づけし、外面の情報とは相手が不特定多数に向けて発信することを許している情報と定義づけを行う。つまりInstagramのアカウントを交換することによって様々な情報を得ることが現代では可能になった。

では具体的にどのような交流が行われているのか、インタビューの内容を見ていきたい。

### 第1節 初対面の相手と会話する際の会話の引き出しとなる

本節では初対面の人間との交流において、Instagramの投稿が重要な役割を果たしていることを明らかにしていく。以下にインタビューを通じて表れてきた発言を見ていきたい。

筆者 「初対面の人とInstagramのアカウントを交換した際に相手の投稿内容に触れますか？」

Aさん 「はい、触れます。」「趣味とかがわかれば、バイク乗るんだ。かっこいいね。みたいな感じで話題にします。」

Bさん 「犬とか好きなアーティストなど共通の話題などがあれば深堀して仲良くなります。」

Cさん 「触れます。最初はやっぱ雰囲気で一発でパッと見た感じでわかりますから。」

Dさん 「会話はしないですね。見るだけ見て、どういう人なのかなってというのは気になるので後から投稿とかハイライトを全部見ます。」

Eさん 「めっちゃめっちゃ触れます。服の系統だったり、行ってる場所だったりとかを話の引き出しにすることが結構あります。」

本節ではInstagramの使い方についてインタビューを行った。特に現代においてInstagramは名刺のような役割を担っており、投稿内容やフォロワー数など一目でその人がどのような人なのかを知ることができる。

このインタビュー結果に共通してみられることは趣味が可視化されたことにより、会話の引き出しになるということだ。従来では当たり障りのない会話を重ねて趣味の話題を引き出す必要があったが、SNSが普及した今ではそのステップを飛び越えて趣味の話題から仲を深めることができるようになった。そのため、ダイレクトに趣味についての話題を相手に対して振ることができるため、関係の構築は従来に比べ容易になったといえる。

また友人選びの一種の指標にもなっていることをインタビューを通して知ることができた。Eさんのように服の系統を会話の引き出しにする背景

としては、自身もまた服好きであるということが伺える。誰しも友人を作る際には、自身と同じ趣味や似た価値観を友人に求めるだろう。その点からみると趣味や価値観が可視化された情報として集約されているInstagramは友人選別に最適な場所といえる。

第2節 共通の知り合いを把握できる

第1節に引き続き、本節ではInstagramにて知り得た共通の知り合いがどのように会話の幅を広げるのかを明らかにしていく。

筆者「アカウントを交換した際に共通のフォロワーがいた経験がありますか？ いた場合はそのフォロワーについて言及したことはありますか？」

Aさん「そうですね。自分の身近な人が思いもよらぬ形で共通のフォロワーだった場合は誰々知ってんの？ みたいな。」

Bさん「高校時代の話とか、その実は後輩バイトの後輩でこういう子がいるんだよって話もできたので仲良くなりました。」

Cさん「そこは何で知ってんの？ みたいな普通にもう単純な疑問をぶつけます。そこで結構相手の出身地とかって知ることができました。」

Dさん「この人が誰繋がりでフォローしてきたのかな？ ってことだけ確認できればそんなに気にならないので、関係性とかは別にあんまり気にならないです。」

Eさん「触れます！ もしその共通が仲良かったら知ってんの？ みたいな。どういう知り合い？ って聞いたりします。」

Instagramでは投稿内容によって趣味だけでなく、共通のフォロワーなども知ることができる。

つまり共通のフォロワーを知ることはBさんや、Eさんのように相手の出身地やバイト先などを知るきっかけにもなり得ることが明らかになった。このことからInstagramのアカウントを交換した時点で互いの仲を深めるためのルートが何通りにも増えるといえるだろう。

第3節 会話する前から事前に相手の情報を得ることができる

第1節、第2節からInstagramが初対面の人と会話する際に聞き出せることが増えるという事例を見てきたが、本節ではInstagramが若者間においてどのような貢献を果たしているのか具体的に見ていきたい。

筆者「会うよりも先にInstagramのアカウントを交換していた場合、会うとなったらその相手のInstagramのアカウントを見に行きますか？ 見に行く場合はなぜアカウントを見に行くのですか？」

Aさん「はい。……不安なので、知れることは知っときたいからです。……（その人と本当に仲良くなれるかどうかという意味合いでですかという質問に対して）それもありますが、ある程度予備知識を持った状態で話せばより仲良くなれるからです。」

Bさん「会ったときに会話を弾ませるためのデッキにしたり、相手の服装の系統などを事前に確認して合流する際にイメージを持ちやすくするために活用しています。」

Cさん「見に行くっていうか会うってなるならまず見てます。その人の雰囲気だったり、性格はこんな感じだとかを想像しておきたいので。」

Dさん「見ます。話が広がるかなって思う

ので、その人の趣味みたいなのを確認したいと思って、会話の引き出しとして使いたいから確認しに行きます。」

Eさん「見ます！やっぱり服の趣味などがわかればしゃべりやすかったりするのです。」

Instagramを利用すると必ず他者とのかわりができる。そのつながり、すなわち交友関係を可視化できる機能がフォロー欄、フォロワー欄である。それらはワンタップで容易に見ることができるうえに、共通のフォロワーまでも見やすいようにリスト化される。このようにInstagramのアカウントを交換するだけで他者と話していないため、知りえることのない側面まで覗くことができる。また芸能人やアーティストなどをフォローしている場合は相手の趣味嗜好までも把握することができるため、相手が話しやすいと考えられる領域の話に誘導することも可能である。その中で自分と同じ趣味や同じアーティストが好きであることが考えられる場合には友人選びの一助を担う役割もInstagramは果たしている。

現代では上記の要素を会話の引き出しにも活用することができ、大幅に交友関係を築くことができる範囲が拡大した。その拡大された交友関係は、共通の知り合いを範囲内に生み出し、相手と共通の知り合いの関係についても知ることができる。アルバイト先が同じであることは、相手がどのようなアルバイトをしているのかという情報を得るきっかけになり、中学校や高校が同じという場合は相手の出身地を知るきっかけにもできる。しかし会話の引き出しにするか否かはその共通のフォロワーについての情報量が多いときに限られる。

仮に相手と話すよりも前にInstagramのアカウントを交換していたならば、相手についての予備知識を備えた状態で交友関係の構築を開始できるようになった。以上に述べてきたように、本章で

はInstagram及びSNSの普及は若者の関係構築に関して大きな貢献を果たしていることが分かった。

次章では、初対面の相手から一歩踏み込んだ「友人」という存在を作る際にSNSがどのように作用するのかを明らかにしていく。

#### 第4節 第2章まとめ

本章を通して若者のSNSの活用の仕方を具体的に見た。インタビューを通して初対面の相手に対して会話の幅が広がる事例が明らかになった。

第1節ではInstagramのアカウントが名刺のような役割を果たしており、アカウントを交換するだけで互いの趣味や服装、好きなアーティストなど従来では親交を深めなければ知り得ることのなかった情報まで一目で得ることができるというInstagramが現代で担っている役割を明らかにすることができた。

第2節では共通のフォロワーという互いの知り合いを表示できる機能がどのように会話のきっかけとして機能するのか具体的な事例を挙げた。

第3節では第1節、第2節のまとめとして初対面の相手に対してどのようにInstagramを活用するのかを事例を基に明らかにした。

これらのことから、現代において若者間では既にSNSが爆発的に普及しており、容易に知り合い同士になることが可能になった。また知り合い同士という一対一の枠に収まらず、共通のフォロワーを見つけそこからさらに詳しく相手について深堀をすることが可能になったため、交友関係を広げることであったり、新たな会話のきっかけになるなど若者にとってSNSは友人作りの観点からみて多大な貢献を果たしていると第2章ではいえる。

### 第3章 友人作りの多様化

本章ではSNSが普及する以前と以降での友人作

りの変容について述べていく。また友人にはなりたくないという人の特徴にはどのような変化があったかも明らかにする。

### 第1節 SNSが普及する前と後の友人作りの基準

本節ではSNSが普及する以前と以後の時代で友人作りにおいてどのような変化があったかを具体的に明らかにする。

筆者「中学校ではどのような人と友人になっていましたか？」

Aさん「明るい人や外でよく一緒に遊ぶ人です。」

Bさん「同じクラスなどコミュニティが近い人です。」

Cさん「同じ属性というか、似た属性の人となることが多かったかなと思います。あとはその時の目的が一致している人だったり、例えば部活動が一緒とか、言っちゃえば全国目指すぞみたいな感じです。」

Dさん「自分の近くにいた人と友人になりました。特にこだわりとかはなかったですね。」

Eさん「中学校はもうクラスか部活で同じになった人と仲良くなってるって感じで、SNSを伝ってっていうのはあんまなかったです。」

SNSに触れておらず、友人を作る際には対面にて会話を交わしていた時代は同じコミュニティに所属していたり、家が近いといったように友人作りのハードルは非常に低く、その範囲も限定的である。そのため互いの趣味や価値観などを排してフラットな交友関係を築いていたことがわかる。

筆者「高校や大学などSNSに触れた後では友

人を作る際にどのような変化がありましたか？」

Aさん「大学や共通の趣味など、SNSを通じてわかるようになった点です。」

Bさん「根本はあまり変わってないです。同じコミュニティに所属する人と基本的にはInstagramを交換しているのです。」

Cさん「ストーリーが普及したことで、普段みんなあんまり印象に残らない人でもストーリーとかを通してこの人見たことあるな。っていう風に思うようになったりとかですかね。そんなような人でも印象に残るようになった点です。」

Dさん「投稿内容を見て、共通の趣味などを投稿している人がいれば話しかけに行くようになったので、より友達になるために話しかけに行く幅というものは広がりました。」

Eさん「やっぱり高校とかだと別にクラスとか同じじゃないけど、高校同じだけっていうので、インスタがまず繋がってそこからストーリーとかに反応したりして、仲良くなったりはありました。」

SNSに触れるようになった頃から友人作りに変化がみられるようになった。SNSに触れる前では、同じコミュニティや家が近いといったように友人作りにおいてのハードルは低かったが、SNSの普及に伴い、様々な要素が追加されたことで友人作りのハードルは上がったといえる。

その要素とは共通の趣味や同じ高校など同じコミュニティに属しているという点はSNSが普及する前と変わらないが、その範囲を広げたのは間違いなくSNSが普及したことに起因する。同じクラスではないけれど、同じ学校に通っているため互いをフォローしている。というインタビューの事



例を踏まえると、同じコミュニティという概念が拡張されたことがわかる。これまでは同じクラスであったり、同じ部活といったように限定的なものだったが、その範囲が広がり同じ学校に通っている人の中から共通の趣味や価値観を探ることができるようになったため、友人作りにおける「方法」は簡単になったことがわかる。では友人作りの「幅」はどのように変わったのだろうか。

SNSが普及したことにより、共通の趣味や価値観を持った人を探ることが可能になった。その影響から、共通の趣味や価値観を持った人同士の間で友人というものが成立するようになった。それはSNSが普及する以前の友人作りに比べて「幅」が狭くなってしまったようにも見られる。要は、同じコミュニティに所属しているだけで友人になれた時代から、その要素に付随して共通の趣味や価値観が必要とされるようになったといえる。

## 第2節 こういふ人と友達になりたい

第1節に引き続き、SNSが普及する以前と以後で友人になりたい人の特徴にどのような変化がみられるのかを明らかにする。

筆者 「SNSが普及する前はどのような人と友達になりたかったですか？」

Aさん 「明るい子や放課後に一緒に遊ぶ人です。」

Bさん 「気が合うとか家が近いとかですね。」

Cさん 「まあ、そうですね。同じ志を持つ人です。」

Dさん 「共通の趣味を持つ人です。あとは家が近かったり。」

Eさん 「やっぱり自分と服装の系統に出たりとか。おしゃれだなーみたいなちょっと憧れ憧れを持つこと仲良くなりたかったもありました。」

SNSが普及する以前ではステータスや投稿内容といったリアリティーに踊らされることなく積極的に友人を作ることができたことがわかる。インタビューの中でも、「明るい子」であることや、「家が近い」といったとても簡単な理由で友人を作ることができたとわかる。

筆者 「SNSが普及した後はどのような人と友達になりたいですか？」

Aさん 「Instagramでは相手の趣味がわかるので、自分と同じ趣味を持っている人などは積極的にかかわりたいなって思います。」

Bさん 「友人作りにおいては根本的にあんま変わってなかったかもしれないです。同じコミュニティの人、例えば同じクラスになって始めましてで、交換するケースが多かったの。自分は入学前に SNS 知り合ってるタイプじゃなくて、仲良くなってから交換するタイプだったので、アカウントを交換してから仲良くなってました。仲良くなってから相手のアカウントを見ることによって相手の趣味などがわかるのでより仲良くなることができるようになりました。」

Cさん 「自己表現が多い人とか、個性が強く投稿に反映されている人です。」

Dさん 「私はジャニーズ好きなので、その投稿してることを探して話しかけたり。とかして今の友達とかできたので。趣味って話しかけるきっかけになるので大事になって思っていました。だから友達になりたいて思う人はジャニーズ関連の投稿をしている人でした。」

Eさん 「やっぱり自分と服装の系統に出たりとか。おしゃれだなーみたいなちょっと憧

れ憧れを持つこと仲良くなりたかったもありました。』

共通の趣味や同じコミュニティに所属しているといった点ではSNSが普及する以前と同じことがわかる。しかしそれら要素に加えて、SNS上での投稿内容という要素も友人作りにおいて必要な要素になった。インタビューを行ったそれぞれの人もSNSが普及する前の要素に加え、共通の趣味を投稿していることや、服装の系統などが可視化されたことにより、会話を交えなければ知り得ない情報を得ることが可能になった。

つまりSNSが普及する以前の「明るい子」や「家が近い」といった簡単な要素から「共通の趣味を投稿している」ことや「個性を活かした投稿をしている」といった要素が重要視されるようになったため、友人作りのハードルは上がったといえる。

一見、投稿をしていなければ友人は作れないといったようにも捉えられそうだが、基本的な友人作りの基準は、「同じコミュニティに所属していること」だということがわかるため、ここではSNS上の投稿内容は友人作りにおいて「派生された関係構築に貢献する」とこととする。

つまり、SNSが普及したことによって友人作りで重要視することは投稿内容がいかにか自身と共通点が多いか、いかにか個性が表れているかなどのリアリティーである。基本的には同じコミュニティに所属し、いかにか性格が合うか、いかにか会話が弾むかといったリアルを基準に友人を作るが、そこに可視化された趣味や個性が交錯することによって交友関係の範囲はより広いものへと変化した。

### 第3節 こういふ人とは友達になりたくない

本節では第2節とは対照的に、SNSが普及する以前と以後で友人になりたくない人の特徴にはどのような変化があったのかを明らかにする。

筆者 「友達になりたくないという人がいると思いますが、SNSが普及する前はどんな人がその対象になりましたか？」

Aさん 「先生にたてつくことがかっこいいと思っていそうな人です。」

Bさん 「見ていて痛い人ですね。」

Cさん 「礼屈っばい人ですかね。僕感覚系なんです。」

Dさん 「全体的マナーが悪い感じの人礼儀とか礼儀がちょっとない人だとか。」

Eさん 「でもあんまり喋らない子おとなしめ。なんでも楽しめなくでもない。ネガティブな子ですかね。そうですね、あんまり感情表に出さない子だったり、それかもうなんか変なちょっとずれてる子です。」

インタビューの結果を見るに、SNSが普及する以前における友人作りで障壁になる要素とは性格や常識に沿わない自己中心的なものであることがわかる。つまり現実での立ち振る舞いや、常識的な対応などすべて自身が解消するだけで取り除ける要素であると考えられる。よってSNSが普及する以前では現実、リアルでの立ち回りを誤らなければ必然的に友人ができた時代といえる。

筆者 「SNSが普及した後は？」

Aさん 「お酒やたばこのストーリーをあげている人です。」

Bさん 「ひたすら自分の自撮りだとか他撮りなどなんかちょっとステータスメッセージが恥ずかしいなっっていうような人とかはちょっと見てて合わないなーと思います。」

Cさん 「自己表現しない人です。投稿やストーリーをあげない見る専の人かな。」

Dさん 「投稿数がやたら多い人とかはちょっ

と偏見を持ちちゃいますね。最近あったんですけど、友達とかじゃなかったんですけど、なんでこんなに上げる必要があるんだろう？って結構思っちゃったり、裏垢とかで上げるんならわかるんですけど、本当に1日のうちに何件も自分の自撮りをあげたりとかする人は結構嫌でした。」

Eさん「フォロワーの数とかでマウントを取ってくる人とか？」

これまで通り対面での接触を経て、互いの内面を理解できるのならばInstagramはより関係の発展に貢献するが、対面での接触がなく、内面の理解が済まないうちにInstagramでつながり、一般的に「イタイやつ」というイメージ付けなど負の側面を見せようものなら友好関係の構築へ踏み出す以前に距離を置かれてしまうことが分かった。

よって現代におけるSNS、特にInstagramは良くも悪くも関係構築の大きな判断材料となってきた。しかし相手のいい面も悪い面もあくまでSNS上に存在するリアリティーであり、相手の喋り方、口調、身長、性格など不確定な要素も多いことも事実である。SNS上で相手についてのすべてを知ったと錯覚し、友好関係を築くか否かをそれだけで判断するようになった現代は、より自由に広範囲の友人を作ることを可能にした反面、身近な相手との関係構築の可能性を潰すという側面も持ち合わせていると述べるができる。

#### 第4節 第3章まとめ

本章では全体を通してSNSが普及する前と後の友人作りに必要な要素の変化について明らかにした。

第1節、第2節ではSNSが普及する前と後の友人作りとその基準について明らかにした。インタビューからSNSが普及する前では、狭いコミュニ

ティの中で先入観などを排したフラットな関係構築ができていたといえる。SNSが普及した後では、様々な人の情報が可視化されコミュニティが拡がり、交友関係の幅は広がったといえる。しかし友人作りの観点からみると、従来の友人作りに必要な要素に加えInstagramでの投稿内容など新たな要素が加えられたため、交友関係の幅は広がったが、友人として成立するためのステップが複雑になったといえる。

第3節ではSNSが普及する前と後での友人になりたくない人の特徴について明らかにした。普及する前では、普段の自分の立ち振る舞いが原因となって距離を置かれることがインタビューの結果からわかるが普及した後ではそれに加え、Instagram上での立ち振る舞いもリアルな自分への評価に直結することが分かった。

これらのことからSNSが普及し、容易に新たな人と知り合えるようになった現代だが容易につながれるからこそ友人作りにおいて新たな要素が加わったことが第3章では分かった。

### 第4章 承認欲求の可視化

本章では承認欲求を満たすことを是とするInstagramにおいて、承認欲求を全面に出してしまうことが受け取り手にどのように影響するのかを明らかにし、友人作りにどのような影響をもたらすのかを明らかにする。

#### 第1節 フォロー数とフォロワー数の過度な差

「承認欲求」を見ていく中で外せない要因が本節で見るフォロー数とフォロワー数の差である。では実際にその事例を挙げ、それに対する意見からSNS上での立ち振る舞いが現実の交友関係に影響をもたらすのかを明らかにする。

筆者「フォロー数とフォロワー数の過度な差がある人についてお聞きします、特に

フォロワー数が多いものの、投稿内容は一般人である人について何か思うところはありますか?」

Aさん「誰かに迷惑をかける趣味ではないので、あまり気にしないです。ただフォロワー数とフォロワー数が均等人よりかはあまり友達として付き合っていきたいという気持ちにはなりません。」

Bさん「インフルエンサーならまだしも、自分のただのプライベートアカウントでそれだったらちょっとなんかあるのかな?みたいに警戒というか。思うところありますね。」

Cさん「プライド高そう。イキんな。逆に投稿内容がおしゃれなら芸能関連だったり、目指しているものがあるのかなって気になります。」

Dさん「正直そんなに気にならないです。でも自分からフォローしといてフォロー外してフォロワー稼ぎしているような人は好きじゃないですね。」

Eさん「なんでこんな差があるんだろうとはまず思うかもしれません。自分のことをめっちゃ投稿してる人だったり、なんかいいこだわりあるんだ。みたいな人を見たらすごい。かっこいいみたいな素敵だとは思いますが。」

本節では承認欲求についてのインタビューを行った。Instagramではフォロワー数が多いほどインフルエンサーのように人気があるという一種の指標となっている。しかし投稿内容によっては警戒されてしまったり、距離を置かれてしまうきっかけにもなり得ることがBさんの「インフルエンサーならまだしも、自分のただのプライベートアカウントでそれだったらちょっとなんかある

のかな?みたいに警戒というか。」といった発言からわかった。

だが、Eさんのように「なんかすごいこだわりあるんだ。みたいな人を見たらすごい。かっこいいみたいに素敵だとは思いますが。」という発言から投稿内容によってはとてもプラスに働く一面もInstagramには存在することが分かった。

つまりフォロワー数とフォロワー数に差がある人については投稿内容が重要になると考えられる。投稿内容に自身の個性があふれているものや、こだわっているもの等を投稿している場合は見た人にプラスの印象を与える場合があり、投稿をしていない場合や、フォロワー数とフォロワー数に差を持たせたいがあまりにフォローを外すといった場合などはマイナスに働く事例もある。

このことからInstagram上での振る舞いが現実の自分の評価に直結することが本節ではいえる。

筆者「そういう人が同じ学部にいる場合は仲良くなりたいと思いますか?」

Aさん「あまり好きではないので仲良くなりたいとは思わないです。」

Bさん「自分は苦手なタイプなので距離を置きます。」

Cさん「内容にもよるけど、自己表現してる人は好きなので基本的には全員仲良くなりたいですよ。」

Dさん「言っちゃえばフォロワー稼ぎなどの害がある人は嫌です。でも友達とかでもすごい顔が可愛かったり、おしゃれだったて、フォロワーがもう増えてる人とかもいるので、そういう子は純粋にすごいなって思います。」

Eさん「何のためにやってるんだろうって思います。承認欲求を満たすためなんですかね。見栄とかもあるのかなと思います。結

構嫌かも。逆に投稿内容が魅力的だったり、おしゃれなら友達になりたいです。」

Eさんの「何のためにやってるんだろうって思います。承認欲求を満たすためなんですかね。見栄とかもあるのかなと思います。結構嫌かも。」といった、発言やDさんの「言っちゃえばフォロワー稼ぎなどの害がある人は嫌です。」といった発言からわかるように、フォロワー数とフォロワー数に極端な差がみられる人に対してあまりいい印象を受けないといえる。

このようにInstagram上での振る舞い、例えば自分の承認欲求や権威を示したいがあまりにフォロワー数とフォロワー数に過度な違いを持たせたり、交友関係の範囲を無理に広げようとストーリーで暇電の募集をかけたりとマイナスに働いてしまう側面も持ち合わせている。これらはゼロからの交友関係の構築に多大な影響を与え、友人として付き合うか、付き合わないかの大きな判断材料となる。

しかしDさんの「でも友達とかでもすごい顔が可愛かったり、おしゃれだったりして、フォロワーがもう増えてる人とかもいるので、そういう子は純粋にすごいなって思います。」という発言や、Eさんの「逆に投稿内容が魅力的だったり、おしゃれなら友達になりたいです。」といった発言のようにプラスに働く側面も持ち合わせている。

つまり関係を構築する前に他者についての予備知識を得られることはプラスに作用することもあれば、マイナスに作用することもあるといえる。

## 第2節 日常の何気ないことを連投

本節では若者のSNSの使い方の中でも特に「承認欲求」にフォーカスし、他者の個性を受信する人々が抱く印象を言語化していく。

筆者 「最近ではストーリーの更新の量など

結構言われているのですが、ストーリーの更新の多さやインフルエンサーではないにも関わらず、別に他愛もないことを連投する人がいるじゃないですか。そういう人に関しては何か思いますか。」

Aさん 「簡潔にいうと関わりたくないです。」

Bさん 「日常茶飯事ならちょっとミュートにしちゃうんですけど、誕生日祝ってくれたとか旅行とかなんかそういうイベント的なもので連投は別に気になりません。結局その人との関係値みたいなのところあると思うんですけど、10何個も何気ないことを連投されるのはミュートにします。」

Cさん 「いやその写真がおしゃれならいいと思います。日常を撮るセンスっていうか。まあまずそもそも誕生日とか旅行とかイベント行事でもないのに10枚連投する人はセンスがないに近いかなと。そもそも数的に。内容うんぬん置いて。」

Dさん 「一緒に遊んだ時にいっぱい写真を撮ってってすごい言ってきそう。例えば本当に例えばですけど、ディズニーとかに行った時にずっともう写真を撮り続けてそうで正直楽しくないと思うのであまり友達にはなりたくはないです。でもインスタ映えとか結構お互いにしたいタイプの子たちが集まれば win-win で楽しいんじゃないですか？」

Eさん 「えーなんていうのむず。なんかサブでよくねみたい。仲良くなった後ならまあいいかもしれないけど、仲良くなる前にそれ見たらなんかちょっと嫌かもしれない。」

Instagramには日々の他愛もないことをストーリーに載せたり、投稿をしてプロフィールに表示

させたりと、他者について知ろうとする対外的な側面と従来においての日記やアルバムの役割を果たしている対内的な側面もある。基本的には何を投稿しても個人の自由である。しかし、不特定多数の人々と繋がる性質上あまり連続で投稿してしまうことはAさんの「ただ連投の中に暇電の募集やいま渋谷にいるからいる人会おうという人に対しては関わらないようにします。」という発言からわかるようにその人についてあまりいい印象を受けていないといえる。

### 第3節 一貫性のある投稿について

本節では第1節とは異なり、対内に向かう承認欲求が受信する人々に抱かせる印象を具体的な事例を基にインタビューを行い、交友関係の幅を広げうるのかを明らかにする。

筆者 「白を基調とした投稿や青を基調とした投稿など、系統が揃っている投稿をしている人を見かけますがそれについてはどう思いますか？」

Aさん 「すごいなあとは思いますが、それ以上の感想はありません。」

Bさん 「自分にとってはとてもポジティブに作用すると思います。系統を揃えないからマイナスってことにはならないんですけど。それをやることでしっかりしている人なんだろうなって印象は受けます。」

Cさん 「適当に投稿している人よりかはプラスな印象を持ちます。」

Dさん 「何も思わないですけど、本当にそれ以上の感想はないです。ぶっちゃけやろうと思えばできるかなって思うのと、それが好きなんだって言うだけですね。それでプラスになったりとかは全然しないです。逆に全部例えばなんですけど、すごい極端

ですけどもうたばこたばこ！みたいなアングラな雰囲気を投稿ばかりして系統を揃えている人だけは少し苦手かも。」

Eさん 「自分のこだわり持ってて自分のなんか持ってるんだなっていうふうに思うので、私も見習いたいになるんですね。まあ素敵だなもあるし、マイナスに働くことはないですね。」

インタビューの結果を見るにInstagramの投稿に一貫性を持たせることは他者からしたらあまり興味はないということが分かった。しかしそれをするによってBさんのように「しっかりしている人なんだろうな」といったようにプラスに捉える人もいることも分かった。よって投稿に一貫性を持たせるという行為は、自らの几帳面さや丁寧さなどを他者に対して発信できる効果もある。

ただ、一貫性のある投稿にはアングラな雰囲気 of 投稿ばかりすることによって一貫性のある投稿をしている人も調査の過程で存在していることが分かった。このアングラな雰囲気とは、たばこや薬、ギャンブルや酒といった人間の持ち合わせるくらい側面を積極的に投稿している人を指す。それは見る人によってマイナスに捉えられてしまうことが分かった。

基本的には自身を構成するものや人を自由に上げ、不特定多数に向けて発信することができるInstagramだが、ただ自分が好きな物をあげるといふことには注意が必要であることが分かった。不特定多数に自分を構成する要素を発信できるInstagramを使う際には見る側への配慮も必要であることが分かった。つまり投稿内容によっては一貫性を持たせることで几帳面さをアピールすることができるためプラスに作用することもあれば、マイナスにも変わる側面をInstagramは持ち合わせていることがこの節では分かった。

#### 第4節 現代での友人作りは順序が大事

これまでの第1節から第3節までを踏まえてSNS上での立ち振る舞いが現実の自分への評価に直結することが分かったが、本節ではリアルとリアリティーが反転する前に友人として成立した関係性にリアリティーでの評価が影響するのかを明らかにする。

筆者「では、様々な角度から承認欲求が強いアカウントというのを見てきましたが、Instagramのアカウントを交換するよりも前に友人になった友達のアカウントがそうであった場合、交友関係に影響は出ますか？」

Aさん「影響しません。もう友達になれているので。」

Bさん「友達ならあまり気にしないです。」

Cさん「影響は出ないです。」

Dさん「一回仲良くなったら影響はないです。現実で接する上でそんなに嫌に思うことがなければ影響はないと思いますけど、そういうお酒とかたばこかそういうものあげてる人ってきっと生活にも出てると思うんで、きっと好きじゃないのかなって思います。だから次第に距離を置くことには遅かれ早かれなるとは思います。」

Eさん「全然気にしないかも。」

これまで様々な視点から承認欲求の強いアカウントというのを見てきた。インタビューの方々も様々なシチュエーションについて答えていただいたが、ここで述べたいのは、友人作りの順序の大切さである。

友人を作る際に対面で関係を築いた際にはリアルを参照することになる。その後、相手のアカウントが承認欲求の強いアカウントというリアリ

ティーを見ても関係に悪影響を与えることはないことがわかる。しかしここまでのインタビュー結果からわかるように、承認欲求の強いアカウントに対して他者が抱く感想は、あまりいいものではなかった。個性を出そうとするあまり、一般的な良識から外れた投稿をしてしまっている人は、SNS普及後に友人にはなりたくない人の特徴として挙げられてしまっている。

つまり、リアルを参照することが先か、リアリティーを参照することが先かによってその後の関係性は大きく異なってしまう可能性があるということだ。

本章では、承認欲求が激しいアカウントが存在すると仮定して、そのアカウントを先に見つけるのと、友人として親しくなった後にそのアカウントを見つけるのでは全く逆の回答を得られた。

このことから、出会う前にアカウントを見つけるのか、出会った後にアカウントを見つけるのかでその後の関係性が大きく変わってしまうことが分かった。これはすなわち、現代の友人作りには順序が最も大切だといえるだろう。なぜならば、リアルよりもリアリティーを他者の本質だと決めつけてしまうため、順序によっては、友人関係に至らなくなってしまうからだ。

SNSが普及し、多くの人の趣味や雰囲気可視化され、交友関係の範囲が広がった現代では、より自由に自身の個性を発信し合うようになった。その結果、交友関係が広がる側面もあるものの、逆に狭めてしまう可能性もあるといえる。

#### 第5節 第4章まとめ

本章ではリアルとリアリティーが反転した結果、交友関係は広がるのか、それとも狭まるのかこの論文の核ともいえる部分についてみた。

章の全体を通してSNSを利用する目的の一つでもある承認欲求について様々な角度から事例を挙げ、それに対する反応から自分の承認欲求を満た

すための立ち振る舞いは周囲の人にどのような印象を抱かせ、その印象はリアルとリアリティーが反転した現代でどのように作用するのかを明らかにした。

第1節では承認欲求の代表といえるフォロワー数とフォロワー数の過度な差について述べた。本論文冒頭でも述べた通り、Instagramのアカウントというのは名刺の役割を果たしている。その名刺の最も重要な部分とはフォロワー数である。その数を見るだけで相手の交友関係や所属コミュニティの数など相手の大枠について知ることができる。そんな重要な役割を担うからこそ最も承認欲求が発現しやすい部分ともいえる。そんなフォロワー数が多くなればなるほどそれに付随した投稿内容などが求められ、その個性が認められれば自分への評価というものは必然的に上がることがわかり、逆に投稿内容がそのフォロワー数に見合っていない場合は周囲の人々は警戒心を抱き、友人作りにおいてマイナスな働きをしてしまうことが分かった。

第2節でも引き続き承認欲求についてインタビューを行い承認欲求について周囲の人が抱く印象を具体的に明らかにした。

第3節では外に向かう承認欲求ではなく、内に向かう承認欲求の事例として一貫した投稿内容についてインタビューを行った。内に向かう承認欲求とは自己満足であり、Instagramのアカウントという名刺をよりおしゃれにすることにより、Instagramを開いた際に自身の欲求を満たすことと定義し、これが直接他者に影響することはないが受け取る人にとってはそれがプラスの印象に変わる人もあることがわかり、この節でもリアリティーでの評価がリアルに直結する事例もあることがわかった。

第4節でははいよいよリアルとリアリティーが反転したことによる弊害についてあきらかにした。ここまでで様々な承認欲求の形を見てきたが、外

に向かう承認欲求つまり他者に評価を求める承認欲求では周囲の人々はあまりいい印象を抱かないことがわかった。しかし出会いの順序が変わるだけで友人になることができ、仮にその友人がこれまで述べてきたような承認欲求の強いアカウントの持ち主であった場合でも交友関係に影響は出ることはないとインタビューの結果から言える。

つまりこの節では出会いの順序が重要であることが言える。SNSが普及し、容易に人と繋がることができるようになった現代ではこのように様々な立ち振る舞いを求められ、SNSが普及したことにより、逆に友人作りにおいて求められる要素が増え、従来のフラットな友人作りと比較し難易度が上がってしまったといえる。

このように第4章ではSNSが普及したことにより、容易に人と繋がれるようになり、会話の幅や深堀できるきっかけなど友人作りのルートは増えたが、SNS上の立ち振る舞いがリアルの自分の評価にも直結し、友人として成立するハードルはSNSが普及する前に比べ高いものになってしまったことが分かった。

## 第5章 リアリティーを基準にしたリアル

SNSが普及したことにより、リアリティーに期待するという風潮が高まったということのをこれまで述べてきたが、この風潮を最も象徴する言葉が「マスク美人」または「マスク詐欺」だろう。この言葉は2020年のコロナウイルス拡大に伴いよく耳にするようになった。

大半の人がマスクを着用していたため、目元が強調され、輪郭や口元の特徴が隠れるため実際よりも美人に見えるという意味を持つのが「マスク美人」である。それに関連して、「マスク詐欺」とは、マスクを外した際に想像していた顔の印象と異なることを指した言葉だ。マスクを着用した顔もリアリティーであるため、期待値と現実のギャップからこのような言葉が流行したと考えら



れる。この章ではリアリティーに抱いた期待値と現実とのギャップについて述べていく。

### 第1節 マスク詐欺

本節ではリアルとリアリティーが反転するきっかけとなった「マスク詐欺」を事例にリアリティーから期待値をあげてしまった例を友人間だけに限定し、期待値を下回ってしまった際には好感度が下がってしまうのかを明らかにする。

筆者 「口元が隠れているときはかっこよかったorかわかったのに素顔を見て残念と感じた経験はありますか？」

Aさん 「可愛いと思ってたのに、マスク外したらそうでもなかったって感じたことがあります。」

Bさん 「口元ほかしたり、マスク付けたら、うわちょっとかわいいなあって思ってマッチングしたんすよ。で、いざ見てみたらまあちょっと違ってたと違うというか。違う人の写真使ったのかなって」

Cさん 「あります。異性で。」

Dさん 「あります。異性、同性どちらもあって、やっぱり大学生の始まりはみんなマスクをつけていたので、顔がわからなくて。そんなに親しくない人とは本当にマスクの顔しかわからないこともあったので、コロナ明けに見るとこんな顔だったんだって思うことはあります。」

Eさん 「プラスではない。間違いなく。間違いなくプラスではないけど、その人の人柄をもともと知ってるのであれば、別にそんな下がりはないかもしれないです。」

コロナ流行前では他者の外見を一目で認知でき、交友関係も築きやすかったが、コロナ流行後

にはマスクの着用が義務化され、他者の第一印象はマスクによって阻害され、初めて素顔を確認できるのはSNS上が主流となった。その中で台頭しているアプリはInstagramである。しかしInstagram上にある他者の第一印象はエフェクトやプリクラによって加工されている。このことから本来の素顔を知るという行為は従来と比べ難しいものとなった。

そして知りえたその素顔と現実の素顔にギャップを抱いたとしてもその後の交友関係に影響を与える要素にはなりえないといえる。しかしそれが好意を抱いており、恋愛関係に発展させたいと望んでいた相手ならばどうだろうか。次の節で明らかにしていく。

### 第2節 期待感から勝手にハードルを上げてしまった

第1節にて友人間において相手の素顔に対し、理想と現実のギャップが生じた場合でもその後の関係に影響を与えることがない結果を得られた。本節では友人から少し進んだ存在である好意を抱いている相手に対象を変化させた場合でも果たして今後の関係に影響を与えることはないのかを明らかにする。

筆者 「次に多少好意を寄せている相手の素顔を見た際に理想とのギャップが生じた場合、その人に対して抱く好感度は変わらないのか、それとも下がってしまうのかどちらですか？」

Aさん 「まあ、期待していた顔が自分の中にあったので下がらないことはないです。」

Bさん 「多少下がると思います。」

Cさん 「下がります。もともと想定していたラインより低かったらそりゃ。まあ、期待が悪いですね。ハードル上げすぎたみたい

な。]

Dさん「変わらないです。中身に惹かれるので顔はあまり関係ありません。」

Eさん「大きくずれているなら好感度は下がっちゃうかも。」

本節では前回の節に引き続き、多少好意を寄せており、恋愛関係へと発展させたいと感じている相手の素顔を見たときに理想とのギャップが生じた際に、その後の関係性に影響は出るのかを明らかにする。

ではインタビューの結果を見ていこうと思う。Dさんのみは中身に惹かれるとのことだったため、その後に影響は出ることはないと述べていた。しかしDさん以外の4人は大小あるが、好感度は下がってしまうという結果を得ることができた。

この結果こそリアルとリアリティーが反転した現代に生じる最も大きな弊害だろう。リアリティーを他者の本質と決めつけ、リアルに過度な期待をした結果、関係が破綻してしまう事例だ。

今回は母数が5人の限定された若者を対象とした研究である。そのため、全ての若者に敷衍することが出来るかは、定かではないが、インタビュー対象者の若者全て当てはまる特性が存在することは無視できないだろう。

決して少なくはない数の若者が、SNS上にあるリアリティーを他者の本質と認識し、他者のハードルを期待感から上げた結果、リアルを知ると理想とのギャップが生まれ、勝手に好感度を下げってしまうといった事態に陥っていることが示唆されていることが考えられる。そして、そのような風潮から、「マスク詐欺」や「マスク美人」といった言葉が流行したということも考えることができる。

このように新型コロナウイルスをきっかけにSNSが急激な発展を遂げ、リアルとリアリティーが反転する世の中が訪れた。その結果、好意を抱

いている人に対しては、リアルの素顔とリアリティーから抱いた理想の素顔にギャップが生じてしまった際には好感度を下げってしまうといった事例が見られた。

次の節では、SNS上で人と人が出会うことのできるプラットフォームであるマッチングアプリにおいて、リアリティーがリアルよりも先行してしまった際の弊害を明らかにしていく。

### 第3節 待ち合わせに来た人は別人だった

本節は、マッチングアプリを使い、実際に人と会ったことのある経験がある人を対象としたインタビューを見ていきたい。本研究の協力者の中では、AさんとBさんのみマッチングアプリを使用した経験があった、そのため、以下ではAさん、Bさんのインタビューを見ていく。

筆者「(マッチングアプリで出会った相手の)顔やスタイルがイメージと違った場合でも予定は続行させますか?」

Aさん「続行します。一応自分のために時間を割いてきてくれているので。」

Bさん「一応続けます。ただその間も騙されたと錯覚しながら時間を過ごすと思います。」

本節ではマッチングアプリを使用し、実際に人と会ったことのある方を中心に展開していく。

マッチングアプリを使い、実際に人と会ったことのある経験を持つのはAさん並びにBさんのみであった。彼らはリアリティーを相手のリアルと認識しているため、リアルにギャップを抱いた時その後の予定を続行させるのかという質問をした。

この質問の背景には、SNS上に投稿された様々な意見がある。具体的には、X(旧Twitter)に

て「マッチングアプリの恐怖」というアカウントを検索すると、リアリティーに期待しすぎたあまり、リアルがあまりにもかけ離れていた。という事例を多数目にする事ができる。このような経験がAさん、Bさんにもあるのか、またそのような経験があった場合、その後の予定を続けるのか、続けないのかを明らかにすることによってリアリティーがリアルよりも先行した現代において、デートというものはどのように変化したのかを見ることができると考えたため、このような質問も織り交ぜた。

ではインタビュー結果からリアルよりもリアリティーが先行する現代においての出会いに関する弊害について明らかにしていく。

Aさん、Bさんともにその後の予定を続行させるとのことだったが、Bさんの「一応続けます。ただその間も騙されたと錯覚しながら時間を過ごすと思います。」という発言からマッチングアプリ上のリアリティーをリアルと認識してしまったため、出会った際に理想とのギャップが生じる事態に陥ってしまっていることがわかる。

SNSが普及する以前の世の中ではリアルと先に出会っていた場合、リアリティーから抱く理想のハードルというものはなく、リアルの素顔と対面するため相手の中身までも知ろうとする態勢が出来上がっている。しかしSNSが普及した現代では、リアリティーによって理想の顔というものが形成されてしまい、その理想にリアルが達することができていなかった場合は、中身まで知ろうとする以前にその後のデートないし予定が「騙されたと思いながら時間を過ごす」といったように中身を知るといった態勢がなくなってしまうといえる。そのため現代では、マッチングアプリで会う予定をしていた相手の顔を見ただけでその後の予定を続行させるか否かを決めてしまうという人も存在している。さらに、それをエンタメとして楽しむということもSNS上では確認されている。

これこそがSNSが普及したことによる最大の弊害であり、現代特有の出会いの容易さと関係の発展の難しさであるといえる。

#### 第4節 出会いのハードルは上がっていく

第2節から第3節にかけては、好意を抱いた相手に対して理想と現実の素顔にギャップを感じてしまったらという定義のもとインタビューを行い、友人と好意を抱いた相手とでは関係性に影響をもたらすのは後者のみであることが分かった。

本節では素顔のみならず、SNS上にあるリアリティーとリアルが反転してしまった結果、どのような影響をもたらすのかを具体的に明らかにする。

筆者 「ここまで現実と想像のギャップについて質問しましたが、マッチングアプリで想像と違う人物が待ち合わせに来た際にはその後のデートないし、予定を続行させますか？マッチングアプリを使ったことがない人はInstagramにて投稿されている顔やスタイルがイメージと違った場合、予定を続行させますか？また、そのギャップはその後の関係に影響を与えますか？」

Aさん 「続けるけど、だまされたなあって。最初の印象が違ってても、約束した以上はちゃんと食事代をおごりますね。相手にも失礼ですし。……正直に言うと、最初の印象が大事なので、もう一度会いたいとは思わないかもしれませんが。でも、相手がすごく良い人だったら別ですけどね。」

Bさん 「続けます。一応。」

Cさん 「続けないです。僕は見た目重視なので。」

Dさん 「続けると思います。」

Eさん 「続けます。続けるんですけど、今後

があるかは分からないです。」

Aさんの「顔がよかったから会う約束をしたのに、詐欺の場合もある」や「だまされたなあ」という発言からわかるようにマッチングアプリとはいえ自分でプロフィールを編集できるため本人かどうかの判断がアプリ上ではつきづらく、あってから素顔を知るという事例もある。そのためリアルとリアリティーの差がギャップとなり、よりリアルな顔を見たときに落胆してしまうケースが認められる。

以上のことからマッチングアプリから出会いを求めるということは会うことが手軽な分、リスクもあると捉えることができる。

新型コロナウイルスが流行し、社交の場やサークル活動などが制限されていく中で若者の武器であるSNSも結局のところ他者のいい面のみを抽出したリアリティーであり、それをリアルであると期待をし、そのギャップにがっかりするといった現代特有の事態に陥ってしまうのだろう。

#### 第5節 第5章まとめ

この章ではリアリティーに抱いた期待値と現実とのギャップについて明らかにした。

第1節では新型コロナウイルスによってマスクの着用を義務化されたことをきっかけに生まれた「マスク詐欺」という言葉から本来の素顔を知るという行為は従来と比べ難しいものとなってしまったことが明らかになった。

第2節ではリアルとリアリティーが反転した現代で、リアリティーを他者の本質と決めつけ、リアルに過度な期待をした結果、関係が破綻してしまう事例からマスクを着用することにより素顔を見ることができなくなったことや、SNSが普及したことにより生じる最大の弊害であることが明らかになった。

第3節では第2節にて明らかになった現代の環

境が生じさせた最大の弊害を体験した人に向けインタビューを行い、具体的な事例から現代の出会いの容易さと関係の発展の難しさについて明らかにした。

第4節ではこれまでの節をまとめ、リアリティーに期待する風潮が関係の発展が難しくなったといえる根拠を述べた。これによりSNS上にあるリアリティーとリアルが反転した結果、理想と現実の差にがっかりしてしまうという影響が出るということが明らかになった。

## 第6章 結論

コロナ流行前では他者の外見を一目で認知でき、交友関係も築きやすかったが、コロナ流行後にはマスクの着用が義務化され、他者の第一印象はマスクによって阻害され、初めて素顔を確認できるのはSNS上が主流となった。その中で台頭しているアプリがInstagramである。しかしInstagram上にある他者の第一印象はエフェクトやプリクラによって加工されているものであり、素顔を知るという行為は従来と比べ難しいものとなった。そしてInstagramでは他者の趣味嗜好、交友関係などを話さずとも把握できるようになったため、他者についての予備知識を備えた状態で交友関係の構築を開始できるようになった。

本研究を通してこのように他者についての予備知識を得られることはプラスに作用することもあることが明らかになった。例えば同じ趣味を持つということを知っていれば会話の引き出しにもなることがあり、互いに仲を深めるきっかけとなる。しかし自分の承認欲求を満たすためにフォロー数とフォロワー数に過度な違いを持たせるといったSNS上の立ち振る舞い一つで他者に嫌悪感を抱かせてしまうきっかけにもなってしまうこともあることが分かった。

これらはゼロからの交友関係の構築に多大な影

響を与え、友人として付き合うか、付き合わないかの大きな判断材料となる。これまで通り対面での接触を経て、互いに互いの内面を理解できるのならばInstagramはより関係の発展に貢献するが、対面での接触がなく、内面の理解が済まないうちにInstagramでつながり、負の側面を見せようものなら友好関係の構築へ踏み出す以前に距離を置かれてしまう。よって現代においてSNS、特にInstagramは良くも悪くも関係構築の大きな判断材料となってきた。

しかしその判断材料はあくまでリアリティーであり他者のしゃべり方、口調、身長、など不確定な要素も多いことも事実である。SNS上にて他者についてのすべてを知ったと錯覚し、友好関係を築くか否かをそれだけで判断する現代は、より自由に広範囲の友人を作ることを可能にした反面、身近な他者との関係構築の可能性を潰すという側面も持ち合わせていることが考えられる。恋人も同様にマッチングアプリが普及し、様々な人と出会うことが可能となった反面、アイコンや文面での雰囲気といったリアリティーを基に相手の姿や素顔を想像で作り上げるため、実際に出会った際に作り上げた想像に対してギャップが生じることになる。これは現代の恋愛において関係を構築する前に相手に見切りをつけてしまい、本来はリアルで出会い、互いに先入観を排したフラットな関係を構築できるはずだったものがSNSの普及により、破壊されてしまったといえる。

このことからSNSが普及し、友人関係や恋人作りの幅はさらに広いものとなったと見せかけて実は狭まってしまったといえる。理由として、リアルよりもリアリティーを相手の本質だと決めつけてしまう現代の風潮にある。例えば、Instagramやマッチングアプリにアップされているブライダや、自分の最も自信のある角度など、いわゆる「盛れた」写真をみたとき、それを相手のリアルとして認識してしまうため、現実に期待するハードル

は必然的に高くなる。その期待感から、実際に会ってみたら想像と違ったなどの意見が増え、外見だけで相手に見切りをつけてしまう人が増えてしまった。その結果、本来発展するはずだった関係性も発展することはなくなってしまったという新しい傾向が見えてきた。

以上に述べてきたように、本研究の結論として、現代では容易に人と繋がるができるようになったため、交友の幅は広がるが、友人や恋人として成立するハードルはSNSが普及する前と比較し、上がってしまうといったパラドックスが生じることが明らかになった。

## 参考文献

- 大森美佐、2014、「若者はどのように恋愛関係を発展させるのか—ケータイ・コミュニケーションに注目して」『家族関係学』33：27-39。
- 河合大介、2014、「ソーシャルメディア・パラドックス：ソーシャルメディア利用は友人関係を抑制し、精神的健康を悪化させるか」『社会情報学』3：31-46。
- 中山満子2018、「高校生の友人関係とSNS利用に伴うネガティブ経験」『科学・技術研究』2：127-132。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、荒井先生には多大なるご指導とご助言を賜りました荒井先生に深く感謝申し上げます。荒井先生には本論文をはじめ、インタビューの初歩からテクニックなど本論文を進めるにあたっての様々なアドバイスをいただきました。お礼申し上げます。

また1年次には竹峰先生からフリースクールに関する発表を通して、資料を準備することの大切さを学ばせていただき、4年次にも効果的なインタビューの手法を学ばせていただいたおかげで、本論文ではスムーズに必要なことを聞き出す力を発揮することができました。お礼申し上げます。

寺田先生にも自己・アイデンティティの多元化

傾向の中で若者のSNSの用途について学ばせていただき、本論文を執筆するにあたってのテーマを得るきっかけとなりました。お礼申し上げます。

鶴沢先生にもキャリア関連にてご指導いただきました。仕事の社会学ではまさに就職活動の最中だったため、講義の内容も自身に落とし込みやすく、自らのキャリアを考え内定をいただいた企業の中から最も自分とマッチする企業に就職することができました。お礼申し上げます。

天野先生には統計学にてお世話になりました。「文系脳はボルケーノ」という名言を賜り、自身の数字に関する苦手意識を克服しようと火をつけさせていただいた一節でした。お礼申し上げます。

元治先生には階級階層論にてお世話になりました。コロナ禍のため対面、ZOOMのハイブリッド型の講義ながらも友人間ではかわいがっていただいた人が多く、また荒井ゼミにて開催したハロウィンパーティーでの元治先生の仮装姿は今でも鮮明に覚えています。おかげで楽しい学生生活を送ることができました。お礼申し上げます。

下平先生にはテスト中に不正をした生徒を追い回すという熱血さを直で見させていただき、講義をただこなしていく先生が多い中で信頼を寄せることができ、講義に対しても意欲的に参加することができました。お礼申し上げます。

多くのことを学び、多くのことに気付く4年間でした。この大学での経験を今後の人生に活かし、これからも多くの学びと気づきを得られる人生にしていきます。改めまして、人間社会学科に関わる全ての教授へお礼申し上げます。ありがとうございました。

林 良樹